

エッセイ

## 梅花の宴

倉本一宏

新元号「令和」が発表され、新天皇が即位し、国内は奉祝ムードとなって、まことにご同慶の至りである。ここで少し、新元号の基になった「梅花の宴」当時の政治情勢について説明しよう。詳細は一年前に「平城の都と万葉集」とくに大伴旅人をめぐって」という論文で述べたものである（古橋信孝編『万葉集を読む』吉川弘文館、二〇〇八年）。

神亀四年（七二七）、左大臣の長屋王と親しかった大伴旅人は、大宰帥として筑紫に赴任させられた。長屋王に対する藤原四子の反撃の一環として、王の近辺から遠ざけられたものときされている。

翌神亀五年（七二八）四月、旅人は京から伴った妻大伴女郎を喪った。神亀六年（天平元年、七二九）二月、長屋王の「謀反」が密告され、長屋王一族は葬られた（倉本一宏『奈良朝の政変劇 皇親たちの悲劇』吉川弘文館、一九九八年）。

旅人は筑前守として赴任していた山上憶良たちといわゆる「筑紫歌壇」を形成し、酒と歌（と遊女）に憂さを晴らした。彼の周辺には同じく筑紫に赴任していた地方官人たちが集まり、

盛んに宴飲と作歌を行なった。平城京の華やかさを謳歌したものとされる、

あをによし奈良の都は咲く花の薫にほふがごとく今盛りなり

(奈良の都は咲く花の美しく薫るように、今がまっ盛りである。)

も、彼らの情念の結集したものと解することができる。旅人も、

わが盛りまたをちめやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ

(私の年の盛りが再び返ってくることがあるだろうか。もしかして奈良の都を見ずに終わってしまおうだろうか。)

と詠うのであった。ひょっとしたら都を見ずに終わるのではないかという不安を、我々は笑うわけにはいかない。

次いで巻第五に載せられているのが、天平二年(七三〇)正月一三日に旅人の館で開かれた「梅花の宴」である。ここに集って歌を詠んだのは、大宰大貳紀男人以下、三二人の地方官人である。

前年に長屋王は葬られており、旅人にも中央復帰の観測が生じていた。もしかしたら二度と都に帰ることはないかもしれないと心の中では感じている下級官人たちとの間には、微妙な温度差があった。

この宴の序として、紀男人が後漢の張衡の『帰田の賦』を踏まえて作ったものが、このたび

の新元号の出典とされている。当時の日本人が中国の古典から引用して漢文を作るのはよくあることなのだが、かといってこれを「国書」というのも、いささか違和感がある。

加えて、「令」と「和」の取り方が不自然だとか、奈良時代だったら「りょうわ」と訓むのではないとか、まだ他にも考えるところはたくさんあるのだが、ここでは言わないでおこう。さて、旅人はこの年の一月に大納言に任じられ、中央に上ることができた。筑紫に残される地方官人たちは、饗別の宴を張って旅人を送り出した。

憶良公館の部屋とされる「書殿」で開かれた饗酒の日の歌における、

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして飛び帰るもの

(鳥にでもなれたらなあ。都までお送り申し上げて、飛び帰って来るものを。)

ひとつもねのうらぶれ居るに竜田山み馬近付かば忘らしなむか

(皆がうち萎れているのに、竜田山にお馬が近づいたら、嬉しさに後に残った皆のことなどお忘れになってしまうだろうか。)

というのが(巻第五―八七六―八七七)、残された者たちに共通の思いではなかったか。鳥にでもなつて都までお送りしたい(そうまでしても都に行きたい)という詮無い望み、竜田山(河内と大和の国境)に近付いたら我々のことなんて忘れてしまうのだからという屈折は、何とも悲惨である。続く歌(巻第五―八七九)に詠み込まれている、

万代にいましたまひて天の下奏したまはね朝廷去らずて

(万年の後までもおすこやかに、天下の政治を陛下に奏上なさって下さい。朝廷を去らずに。)

のうち、「天下の政治」というのも、政治の根幹である人事、つまり我々を都に上らせるよう、天皇に奏上して下さいとの意かとも考えてしまう。

旅人は、水城で涕きながら袖を振って別れを惜しんでいる児島なる「遊行女婦」に向かつて、

ますらをと思へる我や水荖みずくさの水城みづきの上に涙拭なみだぬぐはむ

(丈夫と思う私が、水城の上に袖で涙を拭くことだろうか。)

と歌いかけ(巻第六―九六八)、筑紫を後にしたのであった。

しかしそれは、長屋王はすでになく、藤原四子の支配する都なのであった。『続日本紀』で旅人のことを「多比等」と記述する史料があるのも、本来は「史」であった藤原ふひとが、「不比等」つまり比べて等しい者がいないという字が用いられていることと裏返しうらがの立場に置かれたのであった(「多比等」というのは、比べたらどこにでもいる奴、という意味か)。

その後、上京した旅人に対して、満誓が贈った歌に対する返歌は、

ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方にしあるらし

(ここ大和にあって筑紫はどちらの方角か。きっと白雲のたなびくあの山の方角なのだろう。)

というものであった（巻第四―五七四）。これを贈られた筑紫の官人たちは、「筑紫はどっちだっけ」などという歌を、どのような思いで聞いたことであろうか。

そして旅人は、天平三年（七三一）七月に死去した。

その直前、七一歳の憶良は、天平二年（七三〇）一二月、旅人に次のように訴えた。

天離る鄙あまがに五年住まひつつ都のてぶり忘れえにけり

（鄙に五年住み続けて、都の立ち居ふるまいを忘れてしまいました。）

かくのみや息づきをらむあらたまの来経行く年の限り知らずて

（こんなふうにはかり溜息をついていることでしょうか。来ては過ぎて行く年の果てを知らないで。）

我が主のみ霊賜ひて春さらば奈良の都に召上げたまはね

（あなたさまの御かげを蒙って、春になったら奈良の都に呼び戻して下さい。）

地方に五年もいて都の振舞いも忘れてしまった、過ぎ行く年の限りも知らない、あなたのご愛顧で春になったら都に召し上げて下さい、という三首は、悲惨を通り越して、むしろ滑稽ですらある。筑前守という地位ですら、その門地からすれば異数の出世であったはずなのに、彼はあくまでも中央復帰こそ官人のあるべき姿と思っているのである。

その甲斐あってか、天平四年（七三二）ごろに中央に復帰した憶良であったが（官職は不明）、翌天平五年（七三三）、重態に陥った。見舞いに訪れて容体を尋ねた藤原八束（後の真楯）の使・河辺東人に返事をし終わった憶良は、涙を拭い悲嘆して、絶唱（巻第六―九七八）

を口ずさんだ。

土そのこやも空ひなしくあるべき万代よろづよに語り継ぐべき名は立てずして

(男と生まれた身として無為に終わってよいものか。後世永く語り継ぐに足る英名を立てることなく。)

微官のままに終わった憶良としてみれば、「貧窮問答の歌」(巻第五―八九二)をはじめとする自分の歌が『万葉集』に収められ、歌人としての名がはるか後世にまで語り継がれようなどとは、夢にも思わなかったに違いない。それは筑紫とともに歌を詠んだ他の官人たちにとっても、同様の思いであったはずである。

平成の時代は、近代史上初めて、戦争の無かった時代であった。前近代には対外戦争はほとんどなく、内戦も少なかった日本の、これが本来の姿なのであろう。ただ、平成日本は幾多の大災害に見舞われた。新しい時代は、戦争はもちろんのこと、災害も無い時代であることを願って已やまない。

(国際日本文化研究センター教授)